

令和5年度 知床博物館特別展

斜里平野の魅力

— 人と自然による景観形成の歴史 —

特別展通信 Vol.3

R5(2023).7.1

斜里町立知床博物館

知床博物館 特別展

とき 9月23日(土)~12月17日(日)

ところ 知床博物館 交流記念館ロビー



基線と飽寒別川(排水路)

博物館では斜里平野の人と自然の営みに注目した特別展を開催します。この通信はその準備の様子をお知らせするために毎月発行しています。

今回は、斜里の市街地や農村地帯が急速に発展した大正時代の斜里平野の様子を交通手段の変遷や団体による入植などから探ってみます。

8 輸送・交通手段の変化

明治31年(1898)の植民地開放は「殖民区画図」によって入植場所が決められていきましたが、現地には森林や湿地が広がり、根室街道と呼ばれた一部の道を除いて人が歩くことさえままならないような状態でした。

作物を作っても輸送が困難な明治30年代頃までの入植者たちは、漁場の日雇い人夫や開墾した木を売る(買上げてもらって)ことなどで生計を立てながら「農業」を営んでいました。

下の表は交通と輸送手段の変遷を示していますが、江戸時代以来の海路や海岸利用から次第に内陸路に移り、特に大正時代を境に湿地帯だった以久科から市街地への通称「斜線道路」や斜里と釧路方面を結ぶ「野川道路」が利用できるようになり、集落と市街地の物資運搬に馬車や車両が使えるようになっていったのです。

さらに、大正14年(1925)には鉄道が開通し幹線道路の整備も徐々に進むなど輸送・交通の新たな時代に入っていました。

		江戸	明治初~20年代	明治30-40年代	大正期	昭和初~20年	昭和21~30年代	昭和40-60年代	平成
海路	船	■							
	海運		■	■	■	■	■		
陸路	根室街道・海岸/網走	■	■	■	■				
	根室街道・海岸/朱円		■	■	■				
	斜線/豊倉-以久科			■	■	■	■	■	■
道路	3号道路/豊倉-朱円					■	■	■	■
	真鯉-ウトロ					■	■	■	■
	網走-斜里				■	■	■	■	■
鉄道	植民軌道/知布泊					■	■		
	釧網線/斜里駅					■	■	■	■

9 団体入植と農場

斜里への組織的な入植の始まりは、アッカベツ原野への石川芳次です。千葉県人の石川は明治32年(1899)に入植し、翌年に家族を呼び寄せ、さらに小作人を使って石川農場を開いていきました。その後、明治40年(1907)に木材業の島津農場(前櫛田農場)、同43年(1910)には市街地近くに半沢農場などが開かれていきました。

農家人口は、明治34年(1901)に専業・兼業・小作などを合わせて60戸程度(農地48町歩)でしたが、5年後の明治39年(1906)には同190戸(263町歩)、42年(1909)には同518戸と10年足らずの間に10倍近い数に増加しています。

大正時代になると農産物を輸送する道路の整備や第一次世界大戦による好景気などを背景に移入者も増えて市街地も活況を呈していきました。

大正時代の主な団体入植と農場

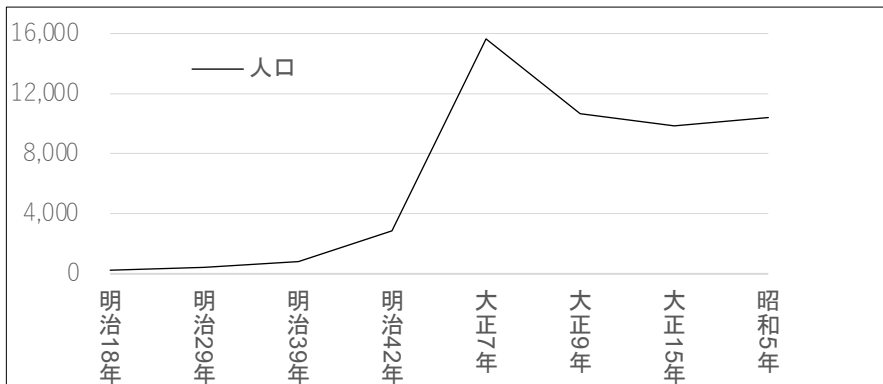
- 大正2/朱円に広島団体12戸
 - 大正3/越川に元木農場・栃木団体、美咲に有坂農場など36戸、大栄に奈良団体28戸
 - 大正4/峰浜に青森団体10戸・神奈川団体4戸
 - 大正5/朱円に南部団体20戸
 - 大正6/上斜里(現清里町)に岐阜団体12戸
 - 大正7/富士に富士農場(数百戸?)
 - 大正9/峰浜に阿波団体12戸
 - 大正12/美咲に朝岡農場(水田)23戸
- * 大正12年に強風対策で朱円校に桜植樹
* 入植団体の多くは大正末の風害で解散

10 斜里町の人口変化

江戸末期から明治前半期にかけての斜里は藤野家を中心に漁業を行う集落でした。藤野家は「斜里場所」の請負人として実質的にこの地域を支配してきましたが、明治2年(1869)の場所請負制度の廃止後もその経営は続いていました。

明治29年(1896)の殖民状況報文では、斜里の人口は115戸432人という記録が残っており、そのうち3分の1はアイヌ、他は青森・岩手・秋田・宮城・新潟・石川からと記載されています。

	♣Hz	13歳・	⑤何	僱→
勸ミ18俵	64	243	㊦オy	
勸ミ29俵	115	432	㊦勞㊦。刷几	
勸ミ39俵	293	832	㊦オy	M 31㊦勞(7)則
勸ミ42俵	717	2,852	㊦オy	么郵俊㊦キ。N
此嶋㊦7俵	3,350	15,641	㊦オy	么郵俊㊦ms㊦
此嶋㊦9俵	2,841	10,680	㊦cm今ぐ	T8㊦psnA凍膜
此嶋㊦15俵	2,428	9,858	㊦cm今ぐ	T8-T11㊦L况(14)
㊦㊦5俵	2,491	10,424	㊦cm今ぐ	



その後、明治31年(1898)の植民地開放によって入植者は増加し斜里平野が本格的に開墾されていきました。

分村前の斜里村の人口は、大正9年(1920)に国勢調査が始まるまでは断片的な記録しか残されていませんが、明治末期から大正時代にかけて一気に増加しました。左記の表と下のグラフからもその様子を知ることができます。

その背景には大正3年(1914)からの第一次世界大戦の好景気を背景にした雑穀類の高騰や林業の拡大がありました。

その後、好景気の終了と大正8年(1919)頃から続いた風害によって農業は大打撃を受けて離農者が相次いだことや小清水町(村)の分村などによって人口は一旦減少しますが、大正時代にすでに現在と同じ1万人を超える数に達していたのです。

